

『思い出のマーニー』にから考える子どもの回復と成長 (ネタバレあり)

東日本国際大学
篠原拓也

大学で児童家庭福祉を教えている私にとって、強い印象に残っている作品の一つが、スタジオジブリの『思い出のマーニー』（2014年、米林宏昌監督）である。

時間の制約もあって授業で流すことはできないが、原作が児童文学作品であり、家族、人間、特に子どもの傷と成長に関する重厚なテーマを扱っているので、学生にも薦めている。

1 あらすじ

『思い出のマーニー』は、幼少期に両親を亡くし、心を閉ざし続けてきた主人公のアンナが、謎の少女マーニーとの関係を通じて、自身の過去を受け容れ、克服することで、成長するストーリーである。

東京で（おそらく養子縁組里親で）養育されている中学生のアンナは、周囲の人々となじめず、他者に心を閉ざした生活を送っていた。養親はひどく心配性であった。あるときアンナは養親が市から手当を受給していると知り、それを黙っているのはお金のために自分を引き取ったからだと思い込み、それから養親にも心を閉ざしていた。

アンナは喘息まで患い、療養のために北海道の海辺の村で過ごすことになる。つまりアンナは実親を失い、里親ないし養親の家に移され、さらに別の家に移されたことになる。北海道でアンナの養育を担ったおじさんとおばさんは器の大きい好人物であった。しかしアンナは村の同世代のコミュニティには入れず、アンナの「目が青い」ことに興味をもった女子との会話に耐え切れず「太っちょブタ」と言って怒らせてしまう。

その後、湿地屋敷とよばれる古い無人の屋敷を見つけ、そこで不思議な少女マーニーと出会う。アンナはたびたび夢うつつの状態に陥り、マーニーも現れては消える。それでも二人は、少しずつゆっくりお互いを知るために、1日に3つずつ質問をするという仕方で友情を深めていく。

マーニーがトラウマをもつという丘の上のサイロを二人で訪れると、マーニーは怯えて様子がおかしくなっていく、アンナと一緒にいながら、幼馴染の和彦に助けを求めようになる。アンナは夢うつつの状態になり、その間にマーニーはサイロを去ってし

まったようである。高熱を出して倒れている所を救出されたアンナだが、初めてできた親友に裏切られた怒りと悲しみに苦しむ。

アンナが湿地屋敷へ行くと、窓の内側にいるマーニーから突然の別れを告げられる。マーニーは、明日、どこかに連れていかれるという。マーニーは、アンナを置き去りにするつもりはなかったと謝り、叫ぶと、アンナはマーニーを許し、叫び返す。マーニーと別れたあとのアンナは、少しずつ人に心を開くようになり、友人もできるようになる。養親が村を訪れ、アンナに手当のことをうち明ける。手当をもらっていることでアンナが傷つくかもしれないと恐れ、アンナに黙っていたのだった。アンナはそれを許し、家族への不信や恨みを克服する。

後日、アンナと友人が近所の老婦人にマーニーの日記を見せると、彼女はマーニーの薄幸な一生を語り始める。マーニーは幼少期に両親から放置され、使用人から虐待まがいの行為を受けていた。和彦と結婚して娘のエミリ（アンナの実母）が産まれたが、和彦は亡くなり、マーニーは心身を病んで娘を寄宿学校に預ける。後に娘を引き取るが、娘はマーニーに懐かずに反抗し、家を飛び出した。エミリはその後に知らぬ男と結婚し、子ども（アンナ）もできたが、エミリも夫も交通事故で亡くなってしまふ。マーニーもアンナを引き取ってわずかな交流の時期を経たあと、亡くなったのだった。

こうしてアンナは、マーニーが想像上の友達ではなく、とうの昔に亡くなっている、自分の祖母にあたる存在だとわかった。愛着形成の困難を抱えるアンナ自身が祖母であるマーニーの過去を体験し、対話しながら自分の過去を受容し、実の親族や養親からの愛情を再認識することで、これを克服し、成長していくのであった。

2 何が彼女を回復させ、成長させるのか？

被害者的な自己像をもちながら、そんな不機嫌で不快な自分が嫌いで仕方がない状態で、他者に心を閉ざし、大人と愛着形成ができない。そんなアンナは、いくつかの場面で気に入らない他人を「ヤギ」「トド」「ブタ」と動物に例える癖がある。これは他者を人間社会の「輪の外」に置くような言い方でありながら、孤立しているのは自分であるから、逆説的に、いつか自分自身を人間社会の「輪の外」に置きかねない状況を暗示している。

アンナの「喘息」は北海道にいくきっかけにはなっただろうが、作品中ではほとんどフェイクのようなもので、ソーシャルワーカーのいう〈バイオーサイコソーシャル〉のような、心理社会的問題が身体的問題に接続しているだけの現象である。

このアンナの困難は実母のエミリからの世代間連鎖でもある。ということは、その連鎖の先には祖母のマーニーがいることになる。マーニー自身、両親から愛情を十分に受けられず、娘のエミリに対してひとり親家庭の母親としての接し方に難しさを感じて

おり、大事な時期に両親の愛を十分に受けられなかったエミリも娘のアンナに何もしでやれないまま死亡し、アンナもまた両親の愛を信じられず孤独になるというように、三世代に渡って家族問題が連鎖し再現されている。アンナは生前のマーニーとの出会いによって呪縛のような世代間連鎖を断ち切ったことになるが、視点を変えれば、死後のマーニーが自らの孫にかかった呪縛としての連鎖を断ち切りに来たことになる。

いったいそれはどのようなになされたのだろうか。以下、3～7に整理して考える。

3 ゆっくりと会話で信頼を築き、過去を探索する

そうしたアンナの困難は、まず、養親と養子（ないし里親と里子）という家族関係、あるいは医者と患者、カウンセラーとクライアントという専門職的な関係の内部に留まっていたのは解決しがたいものである。このことが作中の序盤で示唆されていることが重要である。これは「田舎の自然の空気でも吸ってみれば」という安直な環境の転換でもどうにもならないということでもある。しかも、北海道でアンナの養育を担ったおじさんとおばさんに関して、心配性な東京の養親とは真逆のかなり器の大きい好人物でありながら、やはり彼らだけでも不十分だったということになる。そう考えると、ずいぶんとハードルが高いようにも思える。

地味だが、アンナは〈祖母＝友〉をめぐる不可解な経験のなかで、自己の過去の探索に繋がるような会話中心のコミュニケーションを通して、困難を克服したのだろう。だから、アンナの経験した記憶の追体験のような精神的交流は、幼少期にフォーカスされたのだった。そしてそれは、アンナが、お互いを少しずつゆっくり知るために1日に3つだけ質問をするという約束でマーニーと交流したように、相応の時間をかけるべきものであった。

マーニーがいきなりおばあちゃんの姿で出てこない、出てくることができないのは、マーニーにではなく、アンナの事情として、時間と段階が必要であるためであろう。

4 血縁を知ることで自身を知る

そして、残酷なことかもしれないが、そのような過去の探索は、血縁を抜きには成立しえなかった。その象徴が、マーニーとの生物学的な繋がりを表す記号である「青い目」であった。

作品の序盤で、アンナは村の女子に「青い目」に興味をもたれる場面で耐え切れず暴言を吐く。このことは、単に他者に心を閉ざしていることだけでなく、欠損したアンナの血縁関係に対するアンナの反応でもある。これが終盤では、アンナは「青い目」をも

つ祖母（マーニー）との繋がりを確認しながら、欠損した血縁関係を埋め合わせ、自己を受容するようになる。マーニーが単なるイマジナリーフレンドではなく、祖母であったこと、それも同じ目の色をした血縁関係のある実の祖母であったことが、強烈なメッセージとなっている。

社会的養護や養子縁組のケースでは、どうしても真実告知が避けがたい重い課題となる。アイデンティティを構成する情報を大人が隠しながら、子どもにアイデンティティを形成しろというのは難しく、残酷である。手当をもらっている事実もそうであるが、子どもが、自分が何者なのか、どこで誰から生まれ、どうやってここに来たのか、そしてそれらをどうすれば知ることができるのかという自己の存在がかかった問いに誠実に応答することが必要である。これは「神様」や「コウノトリ」のような物語では満たされず、「育ての親」による物語だけでも満たされない。一人で生まれて育ってきたのではなく、この世界に位置をもっていることを確認するためには、素朴だが、血縁によって説明されるべきなのかもしれない。

人文社会科学の領域ではどうしても社会的親の意義を強く説き、血縁に縛られない家族や社会での生き方の意義を説く傾向にある。しかし血縁は、ないはずがないものであり、それを知らされることで縛られかねないものというより、知らされないことで縛られかねないものであった。

5 他者を許す経験

被害者的な自己像をもちながら、そんな不機嫌で不快な自分が嫌いで仕方なかったアンナは、自分は許さずに、許される人間として生きていた。

アンナは自分を置いて死んだ家族について「ときどき思うの、許さない、私を独りばっちにして」と言い、マーニーに対して「私、あなたならよかった」と言っていた。こうした願望は、他者が自分よりいい生活をしていると決めつけた上で、他者になり替わりたいという傲慢な願望でもある。しかし後にアンナは、自分がマーニーのように誰かにわざと虐待まがいの怖い思いをさせられたことがないことに気づく。つまり、マーニーが他者であると気づいたのである。

そのアンナの成長と回復は、物語の終盤、マーニーを許し、養親を許すことで象徴される。他者に許される人間であるだけでなく、他者を許す人間になることが、ハッピーエンドに不可欠だったのだ。

サイロでアンナは怯えるマーニーを支える立場になり、マーニーに去られたことに怒り悲み、しかしそれでも許すことができた。これはちょうど、養親がアンナを支える立場になり、努力しているのにアンナに懐かれず、やむをえず北海道に送り出す形で去られたが、しかしそれでもアンナを許し続けたことに重なる。許すことをおぼえること

がアンナと養親の信頼をつくっている部分はあるだろう。

ただ、それは類似の経験をしているということに尽きるのではない。究極のところは知りえない世界に生きている他者を許すということが大事だったのだ。サイロでの出来事について、マーニーはアンナに「だってあなたはここにいなかったんですもの」という。ずっとここにいたと思っているアンナにはわからない経験である。しかしお互い別の世界を見て生きていても、それでも受け入れて許すことができるとわかることが大事だったのだ。

6 男性が救済しない世界

アンナが成長した世界は、男性のいない世界であり、さらにいうと、大人が後景に退いた世界である。

その象徴は、まず映画冒頭の男性教師の手である。この男性教師は、座って絵を描いているアンナに優しく話しかけ、手を伸ばし、アンナの絵をほめようというところで、タイミング悪く別の女子に呼びかけられてそちらに行ってしまう。この男性教師は全く悪人でも何でもなく、いい教師である。教師が去って、アンナは暗い顔に戻る。この男性教師も、顔が映らないまま表れて、去っていく。男性のいない世界の表現である。

こうしてこの作品は、アンナが大人の男性に救済されない世界に始まる。そして、そのままハッピーエンドで終わる。重要な人物はすべて女性である。そのような世界でも、というよりその世界だからこそ、アンナは十分に成長し、回復したのだ。

その世界を象徴するもう一人の男性が与一である。与一は寡黙で、アンナをマーニーのところに船でただ渡すだけである。

マーニーの夫となる和彦も同様で、和彦はアンナにとって知りえず、マーニーを奪う存在としての文脈はあっても、触れえない存在である。

孤独や承認、愛着形成、そしてアイデンティティに関係するアンナの困難を、男性への依存ではなく女性同士の友情や繋がりの確認によってクリアすることが、この作品に強いテーマ性を与えている。このことは、親に反発し、男性の後ろに乗ってバイクで去って死亡する末路となった母エミリの人生を、アンナが再現しなかった、あるいは祖母のマーニーが再現させなかったという帰結にも通じている。

7 大人が救済しない世界

北海道でアンナの養育を担ったおじさんは快活な男性であるが、お婆さんはそれと同等かそれ以上に快活である。二人とも何かを解決してくれるわけではないが、過剰に

心配せず、子どもをコントロールせず、少しばかりの注意はするが基本的には許し、そして何より夫婦仲がいい姿を見せる。が、それだけである。それだけに留めている。明らかに望ましい大人像、親像として表現されている。東京の養親と北海道の養親、つまり大人同士が信頼しあい、支え合っている重要な描写もあったが、その姿をアンナに見せていないことが残念であると印象づけられる。

大事なのは、アンナがそうであったように、成長や変化の境目や過程は必ずしも大人からは見えないということである。北海道のおばちゃんはそのことをわかっているようで、成長し回復したアンナについて尋ねる養親に対して「私たちはな一んにもしてないよ」と答えている。子どもは自分で成長するのである。アンナとマーニーのやりとりが「誰にも言わないでね」という言葉に象徴される秘密の関係で行われていたように、大人に知られることは、管理され、自分で成長する力を剥奪されることでもある。

8 おわりに

アンナとマーニーの経験が空想か現実か、精神疾患なのか、神秘体験なのかといったことは問題ではない。アンナが「マーニーが誰だってかまわない」というように、作品においても、そのことがアンナの回復と成長という物語の筋には関係をもたないように表現されていると思う。

最後に、くだらないことを言うかもしれないが、ジブリ作品に出てくる田舎は、いまどき本当にあるのだろうか。舞台になった北海道の町はあるだろうか、その町は本当にこんなところなのだろうか。行ってみるのもいいかもしれない。

アンナは何度か路上で夢うつつになって寝ているが、都会なら即、警察か児童相談所に保護されて面倒なシステムに乗せられ、専門職がいつそう介入を強め、アンナの生活と人生は、全く異なる結末になるのではないか。

2021年4月4日